

【今日の説教から】

「わたしが主にあって大いに喜んでいる」とあります。これは原語では「主にあって大いに喜ばされた」となり、自分から喜ぶというよりは、主が大いにパウロを喜ばせて下さったという意味です。何によって喜びがもたらされたのか、それはピリピの教会の人たちのパウロへの思いがついに復活したということです。

具体的にはどうやらピリピ教会による経済的な支援のようですが、パウロはそれ以上に彼らの心を喜んでいます。

物質的な必要を抱え、貧しさにあっても、彼はその中にあっても満ち足りている道を、経験を通して学び得ました。富の中にあっても彼はその富に踊らされず、「ありとあらゆる境遇に処する秘けつを心得ている」と彼は語ります。

「こうでなければ私は幸せではない」と、私たちは幸せの条件を考えますが、その願いが叶ったからと言って、必ずしも幸せになるものではありません。富むときにも貧しきときにも私たちを大いに喜ばせて下さるお方が共にいて、そのお方は私たちを力づけ、育て、私たちを強くしてくださる。そのお方が私たちと共におられれば、力づけて喜ばせて下さるから、私たちを取り巻く状況はどんなものであってもかまわない。これがパウロが至った境地であり、ピリピの人たちにもその喜びを知って欲しい、「わたしを強くして下さるかたによつて、何事でもすることができる」ことを知って欲しいとパウロは熱く語るのです。

皆様おはようございます。ついに11月に入りました。今年もあと残すところ2か月となりました。ずっと暖かい日が続きましたから、11月という気がしませんね。

いよいよピリピ書も今回と次回で終わりです。この獄中からの力強い語り掛けに、私たちはどれほど慰めと力づけを頂いたことでしょうか。パウロはもう獄に入れられたから彼は終わりだ、彼の語っていたことも信じていたこともみなむなしい、私たちはこの後彼を失つてどうなっていくのだろう。中心を欠いて私たちはバラバラになるだけなのだろうか。いえいえ、決してそうではない。神様を見上げて生きる。神様を信じて生きる。神様を希望として生きる。そして神様の愛に生きる。このことの大切さをこの書は教えます。

4:10 さて、わたしが主にあって大いに喜んでいるのは、わたしを思う心が、あなたがたに今までついに芽ばえてきたことである。実は、あなたがたは、わたしのことを心にかけてくれてはいたが、よい機会がなかったのである。

「わたしが主にあって大いに喜んでいる」とありますが、これはギリシャ語を直訳すれば「私は主にあって大いに喜ばされた」になります。主がパウロを大いに喜ばせてくださった

のです。神様は何によって彼を大いに喜ばせてくださったのでしょうか。

「さて、わたしが主にあって大いに喜んでいるのは、わたしを思う心が、あなたがたに今までついに芽ばえてきたことである。」

ついにあなたは私のために思ってくれることを、心に留めてくれることを復活させてくれた、考えを、思いを、生き返らせ、回復させ、蘇生させ、息を吹き返らせ、元気づかせてくれた。そのことが嬉しいと彼は語ります。

「実は、あなたがたは、わたしのことを心にかけてくれてはいたが、よい機会がなかったのである。」

かねがね考えてはいても、心にかけてはいても、機会に恵まれないということがあります。思っていながらも、実行に移せないということがあります。パウロはピリピの教会の人たちが思っていながら機会を失って何を実行できずにいたということを言っているのでしょうか。

4:11 わたしは乏しいから、こう言うのではない。わたしは、どんな境遇にあっても、足ることを学んだ。

「私のことを遂に再び思ってくれた、思いを復活させてくれた」ということはパウロの貧しさを埋め合わせる経済的援助のゆえではないと彼は語ります。確かにこのことを語るパウロは、直接的にはこの時に再び何かしらを捧げてくれたピリピ教会への感謝に端を発しているのかもしれないですが、彼にとっては物質的な貧しさが彼の問題ではないのだところではっきりと語っています。なぜならば彼は満ち足りる術を経験から学び得たのです。ですから彼が大いに主によって喜ばせていただいたことは物質的な援助を超えたピリピ教会の人たちの真心でした。

4:12 わたしは貧に処する道を知っており、富にある道も知っている。わたしは、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に処する秘けつを心得ている。

低き貧しき境遇に生きる道を知っている。有り余る、必要以上のものを得て生きる道をも知っている。彼はいろいろな境遇の中を通ってきました。

貧しさに生きる道は苦しかったに違いありません。それに比べて、富の中を生きる、必要以上に十分すぎるほどに得て生きる道も彼にはありました。

私たちは思うでしょうか。貧しさを耐えることが出来ることは秘訣と言えるだろうが、富むことに対しては何も思わずにただそれを楽しむだけでいいのではないか、秘訣も何もあったものではないのではないかと。しかし聖書は、富によって人が傲慢に陥って神様を忘れる危険性を語ります。

ホセア 13:5 わたしは荒野で、またかわいた地で、あなたを知った。

13:6 しかし彼らは食べて飽き、飽きて、その心が高ぶり、わたしを忘れた。

箴言 30:7 わたしは二つのことをあなたに求めます、わたしの死なないうちに、これをかなえてください。

30:8 うそ、偽りをわたしから遠ざけ、貧しくもなく、また富みもせず、ただなくてならぬ食物でわたしを養ってください。

30:9 飽き足りて、あなたを知らないといい、「主とはだれか」と言うことのないため、また貧しくて盗みをし、わたしの神の名を汚すことのないためです。

人生とは二面的であり、私たちは絶対貧しさや苦しみは経験したくないと思うのですが、その貧しさや苦しみを通して神様からの深いお守りを知り、生きて助け出してくれる神様をありありと感じることが出来るということもありますし、富によって、何不自由のない生活が約束されてもなお、何か言いようもない孤独と欠乏を心の中に感じることもあるのです。パウロは共にいらっしゃる神様からのありとあらゆるお導きの中、ついに貧しきの中にあっても、富むことの中にあっても、結婚式の宣誓ではありませんが、「病める時も健やかなるときも、富める時も貧しき時も変わることなく愛して」下さる神様によって、どんな境遇にあっても満ち足りて、「ありとあらゆる境遇に処する秘けつを心得」たのです。

2コリント 6:8 ほめられても、そしられても、悪評を受けても、好評を博しても、神の僕として自分をあらわしている。わたしたちは、人を惑わしているようであるが、しかも真実であり、

6:9 人に知られていないようであるが、認められ、死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、

6:10 悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている。

2コリント 11:22 彼らはヘブル人なのか。わたしもそうである。彼らはイスラエル人なのか。わたしもそうである。彼らはアブラハムの子孫なのか。わたしもそうである。

11:23 彼らはキリストの僕なのか。わたしは気が狂ったようになって言う、わたしは彼ら以上にそうである。苦労したことはもっと多く、投獄されたことももっと多く、むち打たれたことは、はるかにおびただしく、死に面したこともししばしばあった。

11:24 ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、

11:25 ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、そして、一昼夜、海の上を漂ったこともある。

11:26 幾たびも旅をし、川の難、盗賊の難、同国民の難、異邦人の難、都会の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、

11:27 労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢えかわき、しばしば食物がなく、寒さに凍え、裸でいたこと也有った。

11:28 なおいろいろの事があった外に、日々わたしに迫って来る諸教会の心配ごとがある。

11:29 だれかが弱っているのに、わたしも弱らないでおれようか。だれかが罪を犯しているのに、わたしの心が燃えないでおれようか。

11:30 もし誇らねばならないのなら、わたしは自分の弱さを誇ろう。

11:31 永遠にほむべき、主イエス・キリストの父なる神は、わたしが偽りを言っていないことを、ご存じである。

11:32 ダマスコでアレタ王の代官が、わたしを捕えるためにダマスコ人の町を監視したことであったが、

11:33 その時わたしは窓から町の城壁づたいに、かごでつり降ろされて、彼の手からのがれた。

4:13 わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる。

結局私たちにとって最も大切なのはこれであると、聖書は力強く私たちに語り掛けるのです。私たちにとって本当に究極的に必要なものは、物質的な繁栄の前に、「わたしを強くして下さるかた」なのです。私たちは生きる限り「ありとあらゆる境遇」を経験しなければなりません。富を追い求めてそれを勝ち取ったら世の中のすべての葛藤から解放される訳ではありません。貧しくなり、あるいは病を得たら回復不能で人生終わりということではありません。私たちにとって本当に必要なのは、「わたしを強くして下さるかた」なのです。そしてその方によって、私たちを力強くしてくださり、力づけてくださる方により、私たちは「何事でもすることができる」、何でもすることができるのです。何という驚くべきことなのでしょうか。

その目の付け所をパウロはピリピの教会の人たちに伝えます。そういう信仰心、外見のものに目が捕らわれるのではなくて神様に目を留めることを志すことを復活させてほしい、そういう信仰の時がピリピの教会の信者たちにまたやってきて、神様は大いに私を喜ばせてくださったとパウロは喜ぶのです。

わたしは、どんな境遇にあっても、足ることを学んだ。

4:12 わたしは貧に処する道を知っており、富における道も知っている。わたしは、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に処する秘けつを心得ている。

4:13 わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる。

4:10 さて、わたしが主にあって大いに喜んでいるのは、わたしを思う心が、あなたがたに今までついに芽ばえてきたことである。

私たちは、そのように、私たちがどんな境遇にあっても私たちを魂の奥深くにおいて満たしてくれるお方、そして富にも満たすことのお出来になるお方を思う心を常に芽生えさせ、息を吹き返し、生き生きとさせ、復活させる、「わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる」との信仰と希望を今日新たにさせていただきたいと願います。

4:14 しかし、あなたがたは、よくもわたしと患難を共にしてくれた。

あなた方は私が患難の時、困ったとき、苦悩、心痛、悲嘆の時、苦痛と疲労の時、困窮と苦境、貧苦と窮乏の時、困難な状況、苦しみの時に良く、適切に、上手に私を助けてくれた、ありがとう、あなたが神様から遭わされた幸いだ、神様があなた方を通して私を顧みてくださり感謝だとパウロは語ります。

誰かのことを深く思い、祈りの言葉が捧げられるとき、なかなか機会に恵まれなくとも、私たちの思いと祈りがそこにあれば、きっと物によっても心によっても、物心両面で神様は私たちを困っている方々の慰めの器として用いてくださることでしょう。

ローマ 12:5 わたしたちも数は多いが、キリストにあって一つのからだであり、また各自は互に肢体だからである。

12:6 このように、わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持ってるので、もし、それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし、

12:7 奉仕であれば奉仕をし、また教える者であれば教え、

12:8 勧めをする者であれば勧め、寄附する者は惜しみなく寄附し、指導する者は熱心に指導し、慈善をする者は快く慈善をすべきである。

12:9 愛には偽りがあるてはならない。悪は憎み避け、善には親しみ結び、

12:10 兄弟の愛をもって互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい。

12:11 热心で、うむことなく、靈に燃え、主に仕え、

12:12 望みをいたいで喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。

12:13 貧しい聖徒を助け、努めて旅人をもてなしなさい。

12:14 あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろってはならない。

12:15 喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。

12:16 互に思うことをひとつにし、高ぶった思いをいだかず、かえって低い者たちと交わるがよい。自分が知者だと思いあがってはならない。

12:17 だれに対しても悪をもって悪に報いず、すべての人に対して善を図りなさい。

12:18 あなたがたは、できる限りすべての人と平和に過ごしなさい。

12:19 愛する者たちよ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、「主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と書いてあるからである。

12:20 むしろ、「もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのである」。

12:21 悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい。

私たちはどんな境遇にあっても、足ることを学び、ありとあらゆる境遇に処する秘訣を心得ています。わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができるからです！！

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。何時も神様が私たちを非常に喜ばせてくださいます。私たちを愛し、育み、強めてくださいます。そんなお方が共にいてくださり、「私たちは自分の置かれた境遇に満足することを習い覚え」、「いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています」。「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です」。この喜びと平安に感謝いたします。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン